

日本の原風景、里で学ぶということ

山形県内陸北部、最上郡と呼ばれているこの地に戸沢村角川地区はある。春、秋は山菜やキノコなど里山の恵みを受け、夏はヤマメやイワナを追いかける子ども達の川遊び、冬は3メートルにも及ぶ積雪とまたぎの猟が行われ、年間を通じて美しい棚田や里山の景観が広がる東北の典型的な山村だ。この村に住み込み始めて4年目を迎える。大学で教育学を専攻する筆者が、環境教育や社会教育のフィールドワークを行う中で、戸沢村教委の学校と地域の連携を掲げた「地域の学校作り」の活動に関心を持ったのが「入村」するきっかけだった。しかしそうした理由だけでなく、思いがけずに長期の滞在になったのは、この地の自然の豊かさに魅力を感じたということもあるが、実はそれだけではない。

角川の里で暮らしていると、人が自然と折り合いをつけながら暮らしやすく居心地のよい空間を創り出し生活していることがよく分かる。自然は確かに美しい、しかし自然に適度な人為の智恵や工夫が加えられたとき、その美しさはさらに研ぎがかけられることになる。角川の里の人々は長い年月をかけて自然に働きかけながら自分たちの「自然」を創り出してきた。また、そうした「自然」に育まれてきたのが各種の郷土料理や農業技術、里山活用の智恵などの「生活文化」と言える。しかし、この自然と人とのコラボレーションは、何もないところからは生まれない。様々な人間ドラマがそこにはある。

角川の里には「結い」とか「講」と呼ばれる地域のつながりを大事にする。詳しい説明はここでは省くが、要はみんなが集まって共同で作業をしたり話をしたりするということだ。そう、人々が互いに助け合いながら、集落として協働で活動をしながら維持し創り上げてきたのが、この里の「自然」や「文化」なのだ。だから、角川の里では何か事を行うとき、必ず地域ぐるみでおこなう。地域ぐるみの教育活動、地域ぐるみの里地里山保全活動、地域ぐるみの修学旅行の受け入れ、地域ぐるみの郷土料理教室・・・等、その例を挙げれば切りがない。こうした「協働」の活動には、現代の日本社会が忘れていた何かを惹きさせるものがある。

日本の自然や文化は「美しい」「豊か」というように形容されることが多いように思う。しかしそのような日本の原風景をなす美しさや豊かさは、角川の里に見られるような近所づきあいの風景の中で形成されたものではないだろうか。表面的に見える「自然」や「生活文化」、それは、その裏にある人と人とが心を通わせながら（時に対立しながら、しかし）協働して創り上げてきた結果なのではないかと思う。それは、人々が共通の経験と努力をし、確かな形として残してきた足跡なのである。

角川の魅力はなんといってもそこに住む人々達とのふれあいだ。里を創出していく彼らとの楽しい、時におかしみをもったコミュニケーションは、里で暮らすことの醍醐味を十分に味わわせてくれるし、また、自分の生き方そのものを見直す鏡ともなる。人生経験が浅い筆者としては、まだまだこの地で学ぶことが多いと改めて感じるこの頃である。